

ての刷新を考へるのは勿論であるが、本誌愛読の我々の誌友の諸姉も三先生の御高説を熱讀吟味して保育の實際案刷新の良き指針させられることをのぞんでやまない次第である。

さらにすゝんで國民學校の低學年ここに一年生の教授の實際につき親しく參觀して、その學校生活の實際の状態に精通しておかなくてはならないといふことは言ふまでもないことである。

今日我々保育の實際家は保育の實際案作成上、從來の保

育の實際を省みて、談話、唱歌、遊戲、手技、觀察等の各保育項目につき、その材料の選擇に、難易の程度、量の點、配列なきの點につき各地各園に最も適切なるものを自ら作りあげなくてはならない。又幼児の生活訓練については殊更に國民學校と同一精神によつて考究したものでなくてはならないことを痛感する次第である。要するに新らしく國民學校が實施されてゐる今日、我々保育者としても幼児保育の上に刷新せられなくてはならない諸點につき考究する事が目下の急務である。

經驗者の言

私は保姆生活十二年、十二年の故に他人は經驗者と呼ぶ。假に自らも經驗者と僭稱する所以である。

最近ある機會に若い保姆さんの手記を見た。先づその眞剣さを敬しい鞭ミも感じ、更に昔の自分の寫眞を眺める様な、なつかしさを覺えつゝ些かの感無きを得ず、茲にその

十文字高女附屬幼稚園 留岡 よし子

手記の一部を記して、「六月號に何かせひ」ミかねて命ぜられてゐた責を果したいと思ふ。

手記は始まる

「私は一體毎日何をしてゐるか。

あの純真な子供達、きの一人として悪い子供がるるだらうか、そんな悪辣ないたづらをした所で（少くも悪辣に見えた）その子自身に悪い所があるのだらうか、そんな理由でしたか、そんなはづみでしたか、私自身分つてゐないくせにその子を憎んでしまふ、そして一瞬後にすまないと思ふ。しかしすまない以後で思つてすむ事であらうか、あのカアツミした時の影響、それが恐しいのだ。それがいけないのだこんなちつづけな自分が、こんな恐ろしい幼児を一人前顔して預つてゐる良いのか、保育だの幼児教育だのもし私が他の人で、今の私を見たしたら、あなたに良心があるならおやめなさい、こいはざるを得ないだらう。さう思ひつゝも止め様も云はず、おめ／＼毎日を暮してゐる一體私はどんな種類の人間か、私に何が出来る云ふのだらう。」

良心の叫びを新な思ひで聴く。併し神の様なこはいふものゝ又悪魔の様なさへいひたくなる幼児に接し、その悪の一面を見せつけられてカアツミするのは人間保母の止むを得ない自然ではないでせうか、怒るもよし、嘆くもよい、憎むも亦よしこいひたい。

が併し時が年が、やがて、「可愛い悪魔よ」を許せる様にして呉れるものらしい。

手記は続く。

自由遊びの指導、した事があるか、子供の心に満足を與へた事があるか、自由に伸び／＼遊ばせた事があるか、私の子供達は自由に遊んでゐる時は必ず悪い遊びだ、私はそれを止めてばかりゐるではないか、何故悪い遊びをせぬ様、良い遊びが出来る様指導しないのか。何故良い遊びに導いてやらぬのか、一度、いはれた事はすぐ「ハイ」云ふ事をきくのよ、云ひ乍ら毎日同じ事を二度も三度もする様な環境にしてゐるのは自分ではないか。一度悪い事をしても環境はちつとも變へず、そんな事をしてはいけない／＼いつてゐるではないか、それでさうして子供達が満足出来るか。

自由畫はさうか、あの自由畫帳を見るが良い。きの頁もめちやくちやだ、私は一人々々の子供達に心からあやまらねばならぬ。自由奔放な思想を矯めてしまつたのは私なのだから。

「私は繪は大嫌ひ」、大嫌ですむのは生徒の頃だ、生徒なら嫌ひなら悪いお點ですむ、今の私がそれで良いか、嫌ひなら一生懸命勉強すれば、良いではないか、嫌ひですましてゐるあの子供達にすむのか、私はもしこの次の世を背負ふ三十何人かの子供の、思想を表現しようとする繪の芽をつんでしまつた、あゝこれをさうしたら良いか、頭を下げてあやまつてすむこまか、あの子供達の一生に通じてすむ

事ではない、私はさうしたら良いのか。

觀察はさうか、事物の確實なる知識を興味の中に把握せしめる。理論丈は知つてゐる。

併し一度だつてこの一等大切な事を満足にしたことがあるか、第一自分自身何に對して確實な知識を持つてゐるか、今にして思ふ、私は一體學生時代何をして過して來たのであらうか、唯々吸々たるつめこみだつたのだ。皆忘れてしまつた。否、覚え込まなかつたのだ、私は自分自身何にも知らぬのにあきれてしまふ。

植物に對して、動物に對して、天文に對して、科學一般に對して、果ては常識に對しても、なんにも知らない。こんな事を自分で認めねばならないなんていふ事は自殺にもまして苦しい事だ、そして、その自分が、子供達に確實なる知識を興味の中に把握せしめようとするのだ。これが無理でなくてなんであらう。私は思ふ、私の子供が皆私の様になつたらさうしよう、それこそ親に對して所ではない、國家に對して申譯ない事である。あゝ私はさうすれば良いのか」

若き保姆さんの苦悶の姿がまざ／＼と浮ぶ。それはやがて自分の曾ての日の姿でもある。聽かう次を、

「手技に對しても同じ事だ、日本人の特有さ云つては悪いかも知れないが模倣のみだ、私は一體今まで幼稚園に關係してから自分で思付きの手技等さいふものを作つた事があ

るだらうか、すべて模倣のみだ、唯私は他人の考へた事を作る機械、作らせる道具になつてゐるのみ。それだけならまだ良いだらう、指導よろしきを得れば幼児は如何に樂しむか、例へ模倣であらうと幼児を満足させれば良いのだから……しかし自分の指導を顧る。私は一生懸命いけな／＼と思ひ乍らも、その結果の奇麗に出來上る事を望んでしまふ。結果ではない道程だとは思ひつゝ又親達にはそれを云ひつゝ自分の心の奥にはきれいに出來る事を期待してゐる。そして途中思ひがけず奇抜な發案をする子供は、おこなく私のするまゝにしてゐる子供よりも、わづらはしく思つてしまふ。あゝなんさいふ事だらう、そして私はその子供達の想像力を奪つてゐるのだ。それに對して私の償ひはさうすればいゝのだ。

談話はさうか、話はさても好きだ、子供達の目を見るに私はいつまでも續けてゐたい、しかしそれさへ模倣のみだ。模倣でもいゝ、それに依つて自分のものを作り上げる事が出来るなら。

併し私はたゞ眞似をしてやるのみ、創作なき全然浮んでこないのだ。私はさうしてかうロマンチックな心を持つてゐないのだらう。私の頭の中は空っぽなのだといつて私は本を讀まうともしない、私は心から怠けものなのだ、悲しい事だ。

唱歌にしても遊戯にしても皆同じ事、音感教育なき全然してない私、音楽に對してちつとも分らぬ私、眞似してうたふのみ、あうむも同じ事だ。みんなくも眞似のみ、遊戯も眞似て踊るあやつり人形も少しも變らぬ。あれよりもつぎ汚いのみ、リズム等分らぬ、つくづく情けなくなり悲しくなる。」

あゝ、こゝに至つて経験者も共々に長嘆息せざるを得ない。十年経れど悩みはつゞく、年毎に繰返す。

種々の技術、次々に發表される歌、遊戯、中々直ぐには自分のものになし得ない。

満足の出来る様に、やるさしたらぎの一つの事でも専門に日夜勵んでもまだ足りないだらう。一體世間は人間保母にどこまでを要求するか、自分に保母自身己を責めるのにかくも厳し過ぎるのに。私は密に許した、我力に限りあり、最善を盡して尙且然り、あるがまゝにあらしめよ。

再び手記

「幼児教育は恐ろしいものはない。今更に思ふ。私の賤たるやすさまじい、私は自分がヒステリックの要素を持つてゐるを認めてゐる。私は賤け方のなんであるかを知らない、まして幼児の心理なきいふものは毛先程も分つてゐない。私は子供に對して愛の心を持つてゐるのかを疑ふ。……、は手記者」

この私が幼児の教育をしてゐるのだ、保育者として一つの要素も持つてゐない私が保育してゐるのだ、さう分つてゐながら私はぬけくも止め様もせず自分の仕事をしてゐるのだ。あゝ誰か私を頭から吐りさばしてくれたら止めるさいつてくれたら。」

自分は子供達を愛してゐるのかいら……この根本的な悩みに苦しめられた事を思ひ出す八年目の頃だつたらう。漸く自分は本當に子供達が好きなのだ。我心に云ひ切れる様になつた時の云ひ知れぬ自己満足の喜びを今日再び味ひしめて、確に愛し育てた幼児等の顔を思ひ描く。

「幼児の爲に私のしてゐる事がこんな影響を及ぼしてゐるか恐ろしい。あの目を見よ、私は悲しい。何故か、皆みんな私の責任だ。あの子供達が大きくなつて、若し何等かの姿で間違つた事をしたら全て私の責任だ！」

手記者はかくも云ふ。保母は神ではないましてや二十そこへのお嬢さんだ……いや、だからこそ、かうした厳しい自己反省も、責任感も起るのだらう。今の自分に反省がないは思つてゐない、が私は敢て云ふ。

「あの子供達がもし何等かの姿で間違つた事をした、いしても私のせいではない、私の生活がなかつたなら更に大きな顔をしてゐるかも知れない」。

暴言か、うぬづればか……否、謙遜ださいはう、さにかく十年を経て神ならぬ我を知り又些の自信を持ち得た。

この手記より半歳の後、この手記の筆者は保姆をやめなければならなくなつた。

「幼児々々幼児、幼稚園で何をしたらう、私は育児の一刻も分つてゐなかつた。

あゝ私は幼稚園をやめてさうなるだらう。何に生き甲斐を感じればいゝだらう。」

「私の子供達よ許してくれ赦してくれ、あゝかういつて子供達の前に両手をつける私だつたら」

「あゝ憂鬱だゝ、家へ歸るささうしてかう気が重いのだらう、つまらないゝ何もかもつまらない。あゝ止めたくない、つやけたい、このまゝやりたい、〇月さいふ月が来ません様に、何でもいゝからかうしてゐたい。

子供達！子供達！氣狂ひになりさうだ、何にも考へずに一日中朝起きるから歸つてから寢てからも子供と一緒にゐたら……

なんでも良いゝ私は止めたくないのだもの」

「止めたくないゝゝゝ、幼稚園にゆく日が一日ゝ減つてゆく、遂になくなるだらう。氣が狂ひさうだ、私はさうなるのだ、一日がもつゝ長かつたら、一日中子供達が側にゐてくれたら……」

私はこの良い仕事を捨てゝ何に生き甲斐をみつけるのか……」

止めたくない！この絶叫が私の心臓にひびく。
手記者よ、

あなたが苦しんだ保姆生活、悩みに悩んだ数年は決して決して無駄ではなかつた……あなたは本當に「いゝ先生」でした。それは誰よりもあなた自身の心の奥に記されてゐる筈です。

否、さうぢやなかつた、あなたに心から——夢中に愛された多くの可愛い腫に、やきついてゐる筈です。更に幼い心を通して多くの親達に、そしてあなたが、すまなく思はれた國家が無言の感謝を送つてゐる事を手記を通して感じます。

さばゝゝ保姆生活が打切れるのだつたら又何をかいはんやです。

やめたくないゝゝ！それで十分ぢやないのでせうか。
やめたくない——さいはねばならぬ機會に出遇はず、ひたすらに、十年餘、悩みつゝも楽しく過し得た幸を感謝しつゝ。

(四、二一八)